

ザ・バウンダリー・スペース・サイエンスの提唱と世界の単位・社会の単位

北海道工業大学 フェロー 橋本 識 秀

1. まえがき

現代が、大変革の時代であることを認める人は多いが、しかし、人類史始まって以来の大変革であると認識している人は少ない。都市文明の名の下に人類が、繰り返してきたであろう大誤に共通する危惧を現代都市文明に感ずる。世界が体験してきた現実からも否定できないからである。人間性を犠牲にする都市の誤りを修景という言葉で正し、さらに自然との共生を謳い、アクア・グリーン・ストラテジーに取り組んできた。また、広域都市圏都市づくりの基本に生存環境開発を問いかけて、ザ・セカンド・シルバニア・プログラムが誕生した。ここに提唱するバウンダリー・スペースが如何に重大であるかを、そんな時間の流れの中で認識を深めていった。22世紀の情報社会の都市構造を如何に構築するかが、21世紀の第一ステージの50年の課題である。何を目標に、何が出来るのかを問うとき、バウンダリー・スペースが偉大な役割を果たすであろうことを強く確信し、提唱するものである。

2. バウンダリー・スペースの年輪

自然としての位置空間と生活の基本となる社会空間から、生活の向上を目指して開発空間が始動する。既存空間の保全と開発空間との調和を図るため、修景空間が生まれた。これが文化のある第2の森のセカンド・シルバニアでは、樹林帯などの緑と水面と文化の流れと島となって、連続空間のネットワークに変身した。また、現代都市文明の連続的思考の限界から、不連続的思考へと移行する中で、次第に醸成され『境界に空間と正義と権利を与えよう』と言うフレイズからバウンダリー・スペースが生まれた。この空間が如何にデザインされるかによって、地域の自然特性や社会特性が描き出されて来る。そこから世界の単位・社会の単位が次第に形成されてくる。

3. 超経済情報社会の認識

瞬時に世界の誰とでも情報交換ができる。国と言うバリアがそこには見当たらない。ほんの束の間の時間で世代間の意識の落差は、突然変異と認識しない限り、理解の困難な言動に直面する。遺伝子工学・人間型ロボットの開発など 50年前の子供時代の夢が現実になろうとしている。生物・情報・宇宙関連産業分野の発展も重大である。さらに農業分野もここに包括されつつある。このことは都市空間にも大きな変化を与えることになる。しかし、これだけでは超経済情報社会の正しい認識に至らない。一人の人間の細胞は、60兆個あると言われている。この人間の細胞の一つ一つに漏れなく30億と言われる遺伝子情報が記録されている。地球上の60億人全員が、人類に関わる地球上の全情報を所持しているということになる。60兆個の細胞が勝手に遺伝子情報を操作したのでは、一人の生命ある人間の存在などありえない。

4. 細胞生体的思考の原点

不連続的な思考の発端は、超経済社会の前兆を感じ始めた頃からで、何事も常に原点(0)の前過去に戻って現代未来をイメージ・デザインする試みの繰返しに求めることが出来る。そんな現実とのギャップのなかで、細胞生体的思考を強く確信するに至った。そこで現代までの時代思考を熟慮の末、原子構造的思考と名付けた。ここで始めて、世界の単位の広域都市圏都市も・社会の単位の生活都市空間も、一つの生命体として認識することの大切さを学ぶことになる。言換えると都市空間も生活空間も部分の集合ではなく、全体として認められなければならないということになる。一つの細胞といえども、元々は幾つかの生命体の複合体である。本当に求められているものは、60兆個の細胞の集合体ではなく、一人の人間としての生命ある存在である。ここに細胞生体的思考の原点があると考ええる。

キーワード： 超経済情報社会・細胞生体的思考・広域都市圏都市・生活空間 4倍革命・新自然河川空間
連絡先： 札幌市手稲区前田15丁目-4-1, TEL 011-681-2161, FAX 011-681-3622

5. 広域都市圏都市-世界の単位

情報化社会の進展に伴い国土の拠点開発や軸開発の連続的な思考から、広域都市圏都市の空間開発への転換が必要となる。世界の単位である広域都市圏都市のデザインに際して、不連続的思考による新自然河川空間の確保を始め、自然環境空間・生活都市空間に関わるバウンダリー・スペースの設定が確定するにつれ、次第にその都市空間の特性が見えてくる。最終的には細胞生活都市空間のレベルまで達する。この細胞空間のイメージ・デザインも、其々の空間の主張を考慮して、より必然性の高いデザインを選択することが重要である。そもそも自由とは、最もその空間にフィットしているものは何かということ、選択肢が多いということではない。バウンダリー・スペース・デザインが広域都市圏都市から細胞生活都市までの生活環境のイメージを定め、社会の単位と共に個人々のライフスタイルにまで影響を及ぼすことになる。

6. 生活空間4倍革命-社会の単位

生活空間が、本当の意味で社会の基本単位となるには、超経済情報社会への移行が不可欠である。現代都市社会における生活空間の理想と現実のギャップは、いま始めて解消の糸口を手中に収めたと言える。21世紀の第一ステージの最大の課題が、生活空間を最重点とした国土デザインであり、政策転換である。生活空間四倍革命の基本空間は、住宅敷地300坪、建坪100坪・述べ床面積200坪の低層建築・樹林緑地100坪・修景広場100坪とする計300坪の標準生活空間を言う。其々の生活空間は周辺にバウンダリー・スペースがあり、独立した空間であることが前提である。細胞生活都市空間のバウンダリー・スペースとの連続性、生活空間内への都市空間の内包が要件となる。樹林帯や水面などの自然空間との連続性・生活文化空間の保全共有など家族としての場空間・時空間の共有意識が、社会の単位の成立条件である。

7. バウンダリー・スペースの確保と基本戦略

7-1 広域都市圏都市のデザインの基本は、バウンダリー・スペースの確保から始まる。最初の基本空間となるのが、新自然河川空間である。ここでの基本は、自然河川としての自由蛇行を許容できる空間の確保にある。正規の改修河川では、現行の川幅の5倍程度となる。堤防は丘陵堤としてバリア・フリーを原則とする。また、河際林・河畔林・丘陵林などの樹林の積極的な保全・植林など自然空間の確保も可能となりバウンダリー・スペースの大きな流れをつくる。河川の安定した自由蛇行を確保するには、新自然河川として洪水毎の流況の変化にも流向を安定させることである。このためには、河川の節目となる個所に流勢制御工や河岸環境工などの対策工が必要となる。河川水面を含めたバウンダリー・スペースは、既存の湖沼や樹林帯などと連携させながらバウンダリー・スペースの連続した流れの基本デザインへと成長する。

7-2 従来、主要都市の縦断的整備に重点が置かれて来た道路整備も、ここでは広域都市圏都市が主役となるため、現在最も遅れている世界の単位-広域都市圏都市間の幹線環状道路を最重点に促進させる必要がある。次に国際空港・港湾・鉄道などの拠点広域都市圏との主要幹線道路、これと並行して広域都市圏間の幹線道路・広域都市圏内都市間・都市内幹線道路など必要に応じて逐次整備を図ることである。ただし、其々の幹線道路は同じランクの生活都市空間内を通過することなく、また必ず樹林空間などの十分なバウンダリー・スペースが準備・確保されていることが欠かせない条件となる。

8. あとがき

本論文では、バウンダリー・スペースの基本的な発想の原点や考え方について述べるに止まった。22世紀を見通しながら、第1ステージである50年後の生活都市空間に視点を移して考えると、維持管理コストの低減-施設の耐久性や故郷意識の育める施設など多くの課題に対応しながら取り組まなければならない。目標は、世界の単位・社会の単位が生命ある空間として存在することであり、バウンダリースペースの主張する地域特性が生かされていなければならない。まとめの一言となると、最終的に生活都市空間の是非を評価するものは、その空間からイメージデザインする自己のライフスタイルの中にあると結論する。